



昭和の文人

江藤淳

新潮社

昭和の文人

江藤淳

新潮社



しょうわ
昭和の文人 ぶんじん

平成元年 七月一〇日 発行
平成元年一〇月三〇日 四刷

著 者 江 藤 淳
え とう じゆん

発行者 佐 藤 亮 一
株 式 会 社 新 潮 社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務〇三六五五一一 振替東京四一八〇八
編集〇三六五五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

© Jan Eio 1989. Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下
さす。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-303306-1 C0095

価格はカバーに表示してあります。

昭和の文人
* 目次

一身にして二生を^ぎ経るが如く
一人にして兩身あるが如し

7

そういう父の一人

20

“辛よ、金よ、李よ、……”

38

“村の家”への裏切り

53

天皇と“五勺の酒” I

71

天皇と“五勺の酒” II

88

『甲乙丙丁』の時空間 I

105

『甲乙丙丁』の時空間 II

122

時空間の変容と崩壊 139

『幼年時代』の虚実 157

無花果の木のある庭 173

麴町平河町と本所小梅町 191

「庭」と「家」——または「最初の宇宙」 210

任意の父の任意の子 227

文学的時空間——その内と外からの崩壊 247

あとがき 266

カバ！ 金唐革紙 紙の博物館蔵

昭和の文人

一身にして二生を経るが如く
一人にして両身あるが如し

1

あれは昭和三十一年（一九五六）秋のことだから、今からほとんど三十年前の話ということになる。私はたった一度だけ、平野謙氏を自宅に訪問したことがあった。

用件は、自著のために序文の執筆を乞いに行つたのである。「三田文学」に、前年の十一月号と十二月号、その年の七月号と八月号というふうに、四回に分けて書いた「夏目漱石論」が、思いがけないことに本になることになった。その本を出すに当っては、誰か文壇の先輩批評家から序文をもらつてほしいという出版書肆の強い要求があり、私が自分で頼みに行く、ということになつてしまつたのである。

実をいうと、本が出る事が決つてからというものの、私は少からずとまどいつづけていた。

一身にして二生を経るが如く
一人にして両身あるが如し

「三田文学」に文芸評論を書いた、というところまではよい。だが、本を出すなどということは、そのころの私の常識では、まだ何年も、おそらくは十年以上も先のことでなければならなかつたからである。

だから、当然私は、山川方夫や桂芳久、田久保英夫などが、「夏目漱石論」の分載が終るか終らぬうちから、

「これは本になるな」

といい交しているのを聴いていると、ほとんど天を畏れざるもの、という気持にならざるを得なかった。しかし、桂芳久の持つて来てくれた何とか書房という所から新書判で出すという話が立ち消えになって、ホッとしたと思う間もなく、今度は田久保英夫が、今井達夫氏の紹介だという東京ライフ社の「作家論シリーズ」に入れるという話を持つて来てくれて、これが驚いたことにバタバタと決ってしまった。

卒業論文の締切を間近に控え、しかも結核の病み上りだという慶応英文科四年生の身にとつて、これはなかなか容易ならぬ事態の出来であった。間もなく本を出すということの内実が、どんなものであるかがわかりはじめたからである。

行つて見ると、東京ライフ社は、神田三崎町の桜門ビルという焼け残りのビルの地下に在る小出版社で、編集一人に営業一人、電話が二本に裸電球が一つ、という怪しい店構えであった。いきおい何もかも自分でやらなければならないということになり、私はいわれるままに、「夏目漱石論」の章立てを変えて小見出しをつけ、『夏目漱石』という商品をつくるという仕事をし、またいわれるままに先輩批評家の誰かに白羽の矢を立て、序文をもらいに行かなければならぬ破目に追い込まれていたのである。

「なにしろそういっちゃ悪いけど、全く無名の人の本を出そうっていうんですからね。偉い先生の序文でもついてなけりゃ、第一取次が取ってくれませんか」

と、頭の禿げかかった丸顔のNさんがいった。Nさんの担当は営業で、肩書は社長であった。

一身にして二生を経るが如く
一人にして両身あるが如し

「あんただって文学青年なら、一人ぐらい日頃出入りしている先生がいるでしょう。まあ、佐藤春夫とはいわないまでもね」

と、苦味走ってちょっとニヒルな翳のあるOさんがいった。Oさんの担当は編集で、その肩書は専務取締役編集局長であった。

ところが、その「偉い先生」の知り合いというものが、唯の一人も私にはなかった。そもそも自分が「文学青年」なのかどうか、私にはあまりさだかではなかった。私はそのころほとんど文芸雑誌を読まず、したがって文壇の事情にもまる切り通じていなかったからである。

私はすっかりみじめな気持になり、だから最初から本を出すなどという話を聞かなければよかったのだと、後悔しはじめたが、本文が組み上ってしまった後の祭とあっては、今更御破算にすることもできない。そこで、「三田文学」の編集部に行つて、山川方夫に、誰に頼んだらよいだろうかと伺いを立てたところ、山川は言下に、

「それは平野謙さんがいい。是非平野さんに頼みたまえ」といった。

どうしてそのとき山川が、他の批評家の名前をあげなかったのかは、今にいたるまで判然としない。あるいはそれは単に、「夏目漱石論」を読んだという平野氏の手紙を、山川が前もって受け取っていたというだけのことだったかも知れない。だが、しかしまたそれは、昭和三十一年秋における「三田文学」編集長の、現役批評家に対する評価をそのままに表わしていたのかも知れない。

いずれにせよ私には、山川の忠告にしたがうほか方法がなかった。平野謙という批評家が、何を書いているのかよく知らなかった私は、それから文庫本で『島崎藤村』を読み、意を決して手

紙で訪問の許可を求め、平野氏の自宅に出掛けて行った。

その家は、小田急線の喜多見という駅で降りて十分ほど歩いたところであり、当時は畑に囲まれていて、いかにも世田谷のはずれらしい閑寂な趣きがあった。私はたしか小一時間ほど平野氏と対坐していたはずだが、何を話したのかはよく覚えていない。しかし、平野氏は終始にこやかで、学生の私を一人前の後輩として遇してくれ、自著のために自ら序文の執筆を求めに来るという行為に附随する気恥しさが、辞去したときにはすっかり雲散霧消していたのが記憶に残っている。調べてみると、そのころ平野氏は四十九歳、私は二十三歳であった。

そのとき、平野氏が書いてくれた『夏目漱石』の序文は、「江藤淳」という表題で『平野謙全集』第九巻（新潮社刊）にはいつている。

《……しかし、手探りで書きだした私の漱石論は難航に難航をかさね、ついに新年号には完成できずに、二月号にまで分載とあいなった。そのあいまに、私はやはり二号にわたって分載された江藤さんの漱石論をぬすみ読むような恰好で読了した。読んで私はほんとに厭世的になった。まだ筆者が在学中の青年かどうかは知らず、わかかわかしい青年の手になった漱石論であることは、一目瞭然であった。しかし、気鋭の青年の手になる漱石論であることによって、私は厭世的になったのではない。その尖鋭な論の独創的なことに、私は厭世的にならざるを得なかったのだ。エライ青年が出てきたもんだ、と私は感嘆した。私はあんまりシヤクだったので、「よさそうに思ったけど、読んでみたら大したことないね。こりゃ中村光夫のエピゴーネンですよ」というようなすてゼリフとともに《三田文学》を編集長にかえしたことをおぼえている。

……》

一身にして二生を経るが如く
一人にして両身あるが如し

という一節を含むこの序文を、山川方夫にはじめて見せたとき、山川は破顔一笑して、「平野さん、えらく正直に書いてるじゃないの。こりゃアいいや、やっぱり頼んでよかった」と、満足そうに何度も肯いていた。

私は私で、序文の末尾に記された、「……目下私はダッソ(?)という厄介な病気を右手の中指にやんでいて、執筆困難なので、(論の中味に立ちいつて、感想を記すことを)一切省略することにした」というくだりを見て、「ダッソ(?)とは脱疽だろうか、平野氏はペンを持ってなくなってしまうのだろうか、と、病人に無理強いして執筆を乞うたことを、申訳なく思っていた。それにしても、私と対坐しているとき平野氏は、指の故障のことなどひと言も私にいわなかった。それは何故だろうか、とも私は思った。

いづれにせよ、そのとき私は、他の多くの昭和の文人と同じように、平野謙氏が、「一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」というような経験をして来た人であることの意味に、全く気がついていなかった。

いや、そのころの私は、「一身にして二生を経る」ということが、福沢諭吉をはじめとする明治の知識人の問題であつたばかりでなく、昭和という時代を生きて来た自分たちの問題でもまたあるのだということを、まだ少しも自覚するにいたっていなかった。

2

《……試に見よ、方今我国の洋学者流、其前年は悉皆漢書生ならざるはなし、悉皆神仏者なら

ざるはなし。封建の士族に非ざれば封建の民なり。恰も一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し。二生相比し両身相較し、其前生前身に得たるものを以て之を今生今身に得たる西洋の文明に照らして、其形影の互に反射するを見れば果して何の觀を為す可きや」（福沢諭吉『文明論之概略緒言』）

福沢諭吉は、この『緒言』の末尾に、明治八年（一八七五）三月二十五日という日付を記している。とすれば、福沢が、「恰も一身にして二生を経るが如し」ということを自覚したのは、明治もまだごく初期のころであつたことになる。それは、逆にいえば、「漢書生」や「神仏者」が「洋学者流」に變身したその變身のあり方が、それだけ歴然としており、また万人の眼に明らかなものだったということを示しているにちがいない。

一方、これに対して、昭和の文人たちについて、「二生相比し両身相較」することが漸く可能になったと感じられるのは、昭和という時代がすでに六十年を数えるようになったからかも知れない。もとより戦前の二十年間と戦後の四十年間は、敗戦によって真ツ二つに区切られてはいる。しかし、それにもかかわらず、それは依然として昭和であり、昭和以外のなものでもない。

私自身そのなかで生を享け、これまで五十二年の生涯を送って来たこの昭和の持続性と断絶性を誤りなく把握するためには、この時代に生きてきた文人たちの多くが、文字通り「一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如き」経験をして来た人々であるという事実を、まず確認して置かなければならない。そして、その上で、その各々について、「二生相比し両身相較し」、「其形影の互に反射する」有様を、篤と見定めて行かなければならない。

一身にして二生を経るが如く
一人にして両身あるが如し

こういう問題の重要性に思い及んだのは、過ぐる夏のころ、井上司朗氏から贈られた『証言・戦時文壇史』（人間の科学社刊）を読んでいたときのことである。

もちろん、私は、まっさきにこの本の冒頭に掲げられている「忘恩の徒・平野謙を弔う」という激越な表題の文章を熟読した。だがそのとき、私の思考を促したのは、井上氏がこと細かに証言している情報局時代の平野氏の出所進退ではなくて、たとえば次のような事実の指摘であった。

《……平野はその前年より情報局文芸課（第五部第三課）に在って、その経緯を知りながら、何か大政翼賛会の仕事を、情報局が横どりしたというようなことを「アラヒトガミ事件」の中で書いているが、全く調査粗漏である。もともと大政翼賛会の組織には、情報局の中樞である内務省系の官僚達は、これを幕府的存在として非常な反感をもっていた。彼等はいずれも、自省の全国的組織にオーバーラップする半官半民間的の翼賛会の出現は、屋上屋として喜ぶ筈はない。特に翼賛会に対して、創唱者の近衛氏が手を抜いたあとは、その存在は、内務省の手によって全く弱体化された。この大勢の進行過程に於て、文学報国会も翼賛会の手を離れ、情報局によって一元的に組織されたもので、翼賛会文化部の仕事を横どりしたなどという平野の見解は、この大局の流れに全然無知である。ただ私自身としては、それまでの小場瀬卓三氏の努力や岸田国士氏のあとをついで文化部長になった高橋健二氏が私の旧制一高一年の先輩で、その校友会雑誌に出された「快悩」という作品からは、若き日忘れ得ぬ共感を抱いていたのに、情報局の翼賛会に対処する基本方針の渦中にある、同氏への個人的友情を生かし得なかったことを、ながくひとり心苦しく思った。（然し、翼賛会文化部長というのは、当時としては、大きな戦争協力ポストであった事も指摘しておく。）》（忘恩の徒・平野謙を弔う（傍点引用者））

なるほど、そうだったのかと、そのとき私は自分の迂濶さを顧みたのである。高橋健二氏といえば、井上靖氏の前に、日本ペンクラブ会長だった人である。昨年五月の国際ペン大会のときにも、私は補聴器をつけた高橋元会長の饗饌とした姿を、会場で何度も見掛けていた。その高橋氏が、翼賛会文化部長の職に在ったとは！

断って置くが、私は、高橋氏を「戦争協力」者として糾弾しようがために、こんなことを書いているわけではない。岸田国士が翼賛会文化部長を勤めたことについては、私は以前から知っていた。しかし、その後任者が高橋健二氏であることは、井上朗氏の文章を読んではじめて得られた知識である。それなら、高橋氏こそは、まさに福沢のいわゆる「一人にして両身あるが如」き人ではないか。そして、氏の今日までの文学的生涯は、文字通り「一身にして二生を経るが如」きものではないか。

いや、ひとり高橋健二氏のみではない。昨年五月の国際ペン大会で、大会実行委員会幹事長として大活躍した、巖谷大四日本ペンクラブ専務理事の場合はどうだろうか。記憶を確かめるために、『日本近代文学大事典』（講談社刊）の、「巖谷大四」の項を索いてみると、保昌正夫氏の筆によって、巖谷氏が、文芸家協会書記と日本文学報国会事業課長を歴任したことが記述されている。つまり、巖谷氏は、かつて文学報国会事業課長として大東亜文学者会議を組織し、いまたペンクラブ専務理事として、国際ペン大会を組織したのである。私は、つい数カ月前までは、文学団体というのは、不思議に人が変っても同じようなことをやりたがるものだと考えていた。なんと浅薄な理解だったことだろう。そもそも人が変っていなかったのである。看板だけを塗り替えた団体を、同じ人が操って同じようなことをしていたのである。